

Ishmael の語りの相

—— 『白鯨』 第79章 ——

野 田 明

『白鯨』という大小説を一挙にとらえることは至難の業である。ここでは仮にその中の一章に焦点を絞り Ishmael の巧みな語り口について調べてみたい。

『白鯨』第79章 “The Prairie” はいわゆる鯨学の諸章に属し、中でもよく論じられる章である。ここで語り手 Ishmael は人相学者となって抹香鯨の額の筋を入念に調べよう (“scan the lines of his face”) とする。まず最初に、我々読者が陥りがちなあらゆる深刻な解釈にもかかわらず、鯨の顔の相を読むという試みは、少なくともそれ自体では無意味なたわむれになる可能性があるということを確認しておかねばならない。そして、そのような自らの試みのふざけぶりを語り手自身、十分に意識しているのではないかと思わせる調子でこの章は始まる。

このような試みはラヴァテルがジブラルタルの巖の襷を吟味し、ガルがパンテノンの丸屋根に梯子をかけて触診したのと同じ位有望なものに思われよう。¹⁾

さらに語り手は「ラヴァテルはかの著名な研究において、さまざまな人相を扱ったのみならず、馬、鳥、蛇、魚の顔をも綿密に研究し、そこに看取される諸々の表情の変化についても詳しく説いている。」と続けるのだが、ラヴァテルもガルも人相学、骨相学を真面目に研究した科学者である。このような Ishmael の語り口が、18世紀に実在した科学者へのからかいであるとするなら、それは同時に、からかわれているラヴァテルやガルの研

究と「同じ位有望な」自らの企てをも、一步突き放していることを意味する。²⁾ そう考えるなら、「私はあらゆることを試み、成功は来るにまかせろ。」(“I try all things; I achieve what I can.”) という Ishmael の宣言は、これからの鯨の人相学的探求という試みを一種の遊びと心得た上でついで来て欲しいという、語り手から読者への暗黙のメッセージである。

さて、その試みを開始するや否や、語り手は、抹香鯨は、「人相学的にみて」、「異常な生物」だと決めつける。鼻は顔の中で「中心かつ最も目だつ」部分であり、表情を「最終的に決定する」ものであるのに、鯨にはその鼻がないからである。にもかかわらず、鼻がいかに重要不可欠であるかを強調した後で、Ishmael は言う、「しかし、レビアタンは非常に雄大であり、その体軀は実に堂々たるものであるから、彫刻のジュピターにおいては致命的となる欠落も、巨鯨にあっては何らの汚点ともならない。」(p. 291)。これは論理的には矛盾した議論かもしれない。しかし、いったん Ishmael に「あらゆることを試みる」ことを許したのなら、読者はあまり気難しく腹を立てるべきではない。そもそも鯨の面相を調べるのに人相学上のルールである鼻をわざわざ持ち出して鯨を「異常」と決めつけるのは滑稽である。だが、そのように滑稽な研究を論じるのに滑稽な論法を用いることによって、結局、語り手は「鯨は雄大であるから、鼻の欠落も問題ではない」と見事に落ちをつけてみせ、その上、鼻の「欠落」(“deficiency”)は、鯨にあっては「付加されたる威厳」(“an added grandeur”)という明快かつ珍妙な等式でまんまと導き出すのである。寛容な読者はこのような語り手の議論そのものを味わうべきだろう。Ishmael の試みを、語り手自身も承知しているであろう遊びと考え、そのつもりで読んでいく時、これはまことに楽しい冒険である。Ishmael の巧みな言葉の選択が示す通り、鯨の人相学は「ジョリー艇で遊航して」(“you sail round his vast head in your jolly-boat”) 行うべき楽しい探求なのだ。

Ishmael は鯨の面相のうちでも、特にその額を賛美する。先程の小型艇との比較でも察せられるように、鯨のイメージは次第に大きくなっていく。

But in the great Sperm Whale, this high and mighty god-like dignity inherent in the brow is so immensely amplified, that gazing on it, in that full front view, you feel the Deity and the dread powers more forcibly than in beholding any other object in living nature. For you see no one point precisely; not one distinct feature is revealed; no nose, eyes, ears, or mouth; no face; he has none, proper; nothing but that one broad firmament of a forehead, pleated with riddles; dumbly lowering with the doom of boats, and ships, and men. (p. 292)

巨大な鯨を対象としているとはいえ、これは、誇張された大きすぎるイメージである。しかし、この箇所の特に後半に、ある種の詩情が漂っていることもまた否めない。あたかも、鯨の壮厳、神秘を語る語り手の言葉そのものが際限なく展開された (“immensely amplified”) かのように、誇張でありながら、無限悠久のイメージを作り出すことに成功している。鯨を滑稽に扱った章冒頭のユーモラスな調子から、いつしか Ishmael の語り、単なる遊びではすまされないものに変化したことに我々は気づく。さらに Ishmael は、抹香鯨を神の座にまでつける。

もし今後いずこかの文化高き詩情豊かな民族が、古の楽しき五月祭の神々を再び蘇らせ、近代の自我主義の空に、神々の久しく訪れぬ山顛に、生き生きと祀らんとするなら、必ずや大抹香こそジュピターの高御座を与えられて、一切を主宰するであろう。(p. 292)

最初は滑稽な鯨の面相学から出発しながら、Ishmael の語りは、鯨を神の象徴としてみるからこそ彼の最終的な目的であったかと思わせる程の詩的幻想に到達した。しかし、単独では圧巻ともいえる壮大なイメージであ

るこの箇所も、見方を変えて章全体の脈絡からとらえると、いくらかその厳肅さを割り引きされる。というのは、抹香鯨が祀られるべき「ジュピターの高御座」には、章の初めに Ishmael が「フィディ阿斯作の大理石のジュピター像」に言及した時のふざけた調子が、否応でも影響を与えずにはおかないからである。「フィディ阿斯の大理石のジュピターから鼻をいでもみよ、残りは何という惨めさ！」(“Dash the nose from Phidias’s marble Jove, and what a sorry remainder!” (p.291))。鼻をもがれたジュピター像の代わりに鼻のない抹香鯨の像が据えられた光景を想像するなら、広大な詩的幻想のイメージも、幾分かユーモラスなものになってしまうだろう。語り手が、鯨を本気で神の象徴と見なしていると断言はできない。(なお、鯨の崇高な横顔を称えるところでも、あろうことか章の冒頭で諷刺されたラヴァテルの天才線が引き合いに出される。)[「あらゆることを試みる」というだけあって語り手はしたたかなのである。

さて、この章でも最も問題とされるのはその締め括りである。Ishmael は、抹香鯨は何も語らないけれども、その額の襞は謎に満ち(“pleated with riddles”)、そこには解くことのできぬ文字が刻まれているという。この章はその文字を解読することの不可能に対する Ishmael の嘆きで終わる。

Champollion deciphered the wrinkled granite hieroglyphics. But there is no Champollion to decipher the Egypt of every man’s and every being’s face. Physiognomy, like every other human science, is but a passing fable. If then, Sir William Jones, who read in thirty languages, could not read the simplest peasant’s face in its profounder and more subtle meanings, how may unlettered Ishmael hope to read the awful Chaldee of the Sperm Whale’s brow? I but put that brow before you. Read it if you can. (pp. 292-3)

Dryden はこの箇所について、抹香鯨の額に刻まれ、Ishmael が読めな

い文字は人間の直面する世界の比喩であり、Ishmael の嘆きは、人間の認識的探求の空しさを表すと考える。彼によれば、「Ishmael が鯨を象形文字と見做すのは…（中略）…全てを意識の対象としようとする人間の努力を示唆し、同時にその努力が失敗に終わることを暗示」している。³⁾

既に第32章において、Ishmael は鯨を本にみたてていた。鯨をテキストなり現実なりと等しいと考える仮定そのものには何の意味もないとしても、語り手があくまでそのように設定された世界の中で虚構の鯨を追求するのなら、その鯨はある究極的な真実の記号となりうる。すると、鯨の額の文字が読めないと言うことは、認識的探求の徒労を表すのかもしれない。

それにしても、Dryden の解釈はいくらか、深刻にすぎるように感じられる。鯨の額に解説不可能な文字が記されていると語り手 Ishmael はどこまで本気で考えているのだろうか。別な批評家によれば、「無論、鯨はテキストと同じではないし、それこそ Ishmael の言いたいことなのだ。彼の文体の調子——そのふざけたユーモアは、我々をして、Ishmael の試みはただ冗談でしているのだという事実気づかせるのである。』⁴⁾ 確かに、Dryden が切り捨てたこの章の前半のユーモラスな調子を見逃すことはできない。それではまったくの冗談なのだろうか。

そこでもう一度、引用の最後の部分に注目すると、それがいろいろな意味に受けとれることがわかる。Ishmael は鯨の額を象形文字の彫られた一種のテキストと見做し、それは無学な自分には解くべくもないという。そして彼が「私はただその額を諸君の前に置く。出来るなら読まれよ。」と言う時、それは文字通り「額の文字が読めないこと」に対する絶望ともとれる。しかし、同時にこの文は「額の文字など読めるはずがない。もともとテキストならぬ鯨の額に文字など書いていないのだから。」という擬装された告白ともとれる。Ishmael が “unlettered”（無学）なのではなく、鯨の方が “unlettered”（文字の記されていない）なのだという洒落めかした落ちに気づくのがより賢明な読者ではあるまいか。（実は Ishmael 自身は、後の第102章によれば、鯨の寸法についての「貴重な統計」で文身されている

る。)そうとるならこの2行は、鯨が鯨以外の何か、テキストなり現実なりを表す Ishmael の世界の魔法から読者が一瞬、解放される幻滅の瞬間である。Wadlington が、「Ishmael のレトリックの究極的目的は読者を我に帰らせることである。」と述べているのは、この意味で全く正しい。⁵⁾ しかしながら、この章末の部分を中心に、章全体の中に位置づけてみよう。

章末の2行が非常に大きな力をもつのは、それがいわば「実際に」鯨の額を「置く」というその行為による。この2行はいずれもごく単純な単語いくつかから成り、“put”という語も何げない動詞なのだが、この何の変哲もない語の威力は、ことこの章においては、“mighty,” “stately,” “great”などの他のものものしい語にたちまきって絶大である。この章を通じて、鯨のイメージは壮大であり、上のような形容で賛美され、拡大されてきた。しかし、最後にはロゼッタストーンと同じ大きさに扱われてしまう。天空にまで祀りあげた鯨を瞬時に収縮させて、語り手は読者の眼前に突き出す。胴体から切断され、花崗岩と同じほどに収縮し乾燥して、詩的な謎の襞 (“pleated with riddles”)ではなく、グロテスクな象形文字を刻まれて変形した鯨の頭部は、真に不気味 (“awful”)なイメージであるかもしれない。誇張された鯨の扱いに慣れた読者はふとその額を差し出されて、一種の「現実」に出会うのである。無論、収縮した鯨も別な虚構であるけれども。

ともあれ、章にわたっての鯨に対する過剰な賛美、誇張された形容には、最後に鯨が小石にすりかえられて無雑作に置かれることによって、適度な釣合いがもたらされる。語り手は鯨を、まず拡大し、次に縮小してみせたのである。おそらくこのような離れ業も、Ishmael が初めに予告した「あらゆること」のうちに数えられるのだと考えるなら、「鯨の額を読んでみよう」という言葉は、語り手から読者への挑戦とみることもできよう。

最後の箇所がいかに大きな力をもつとはいえ、それはこの章全体、ひいては鯨学全体の調子を決定し、色づける程のものではない。次章の冒頭では、鯨の額は再度拾い上げられ、“Sphinx”に拡大される。章末のレトリックは、いわば多様に変化する語りの相の中の一側面にすぎない。

Ishmael の語りは抹香鯨を題材として連続していながら、あるときは遊びに、あるときは崇高、壮大なイメージに、あるときは一瞬の覚醒にというように、さまざまな印象、効果を読者に与える。そして変化する種々の語りの相は、それぞれ互いに影響しあって、他によって覆されはしないが、そのいずれの1つも、絶対的になるということはない。逆に言えば、1つの語りの相は、他の相が存在する故にひきたてられる。(例えば、章末のレトリックはそれまでの過剰な形容がなければ力を発揮しないだろう。)

第11章で、蜜友 Queequeg と毛布一枚にくるまった快適な体験をもとに、語り手は「真の暖かさを味わうには、身体のだこかが寒くなければいけない。」と述べ、「およそ世の中に比較対照によらずにその性質を発揮するものはない。何ものもそれ自体では存在しえない。」(“... there is no quality in this world that is not what it is merely by contrast. Nothing exists in itself.” (p. 55)) と結論づける。この「何ものもそれ自体では存在しえない」ということは、互いに相対化しあい、かつ力を発揮する彼の語り口にも当てはまる言葉である。

実を言えば、Brodtkorb が、「Ishmael 的眞実とは相対性という眞実なのだ。」と断じるのに引用したこの金言めいた言葉すら、Ishmael の巧みな語りの一部として、『白鯨』というテキストの中に置きもどされたとき、決して無傷ではありえない。⁶⁾ 同じ箇所には Ishmael が書き加える、一見余計な続きを、我々は読みとばしてはならない。

それ故寝室には暖炉を備うべきではなく、それは金持ちの陥る不快な贅沢の1例にすぎない。この種の快美の極致を味わうためには、諸君と諸君の心地良さと外気の寒冷との間に毛布一枚以外、何もないということが必要である。そうすれば諸君は、氷結する極地のただ中にあっても、1つの暖気の火花のように横たわることができる。(p. 55)。

毛布一枚の快適さが、極地にまで誇張して適用されてしまったとき、(た

だの毛布ではなく、鯨の「毛布皮」がなくては極地では「垂直に凍って」しまうということは、Ishmael 自身が後に第68章で述べるところである）「何事も比較の問題」という「Ishmael 的眞実」も、一種の詭弁らしくきこえ、その価値を多少削がれるのではないだろうか。そうだとすれば、それも語り手の計算づくである。どう比較しようとも、寒いものは寒いのだから。

互いに相対化しあうような多様な相をもちながらも、Ishmael の語りは、やはり鯨という一つの柱によってしっかり支えられている。たとえ我々読者への効果としては、Ishmael が鯨を軽視し、あるいは鯨の学問的探求を冗談でしていると思われる場合があるとしても、彼が決して文字通りにはそう言わないことはこの点、非常に重要である。どのような印象を、事実上読者に与えるにしろ、鯨の探求、鯨の賛美という点で Ishmael の姿勢は一貫している。第134章で、白鯨を熱狂的に追跡するうちに、あらゆる雑多な乗組達が Ahab と一体となったことの比喩として、Pequod 号は次のように描写される。「船は、あらゆる反対物の寄せ集め(“it was put together of all contrasting things”)でありながら、これらすべては互いに集合して一つの堅い船体を形成し、長い中心竜骨によって平衡と指向とを与えられて驀進するのだ。」と (pp. 454-5)。これはまた、複数の語りの相が相互に拮抗し、あるいはひきたてながら、抹香鯨という主題を中心竜骨として一体となり、大きな力を生みだす Ishmael の語りの構造の比喩としてもふさわしい。⁷⁾ 鯨を主題とするという点では一貫していながら、多様に変化する語り口から、読者はさまざまな効果を伝えられ、あるときは真剣に、あるときは冗談に受けとりながら読み進むのである。

註

¹⁾ Herman Melville, *Moby-Dick*, ed. Harrison Hayford and Hershel Parker (New York: W. W. Norton & Co., 1967), p.291. 以下小説からの引用はすべてノートン版により、頁数は本文中に示す。

²⁾ 厳密には、Ishmael が、ラヴァテルやガルを諷刺しているという印象はあって

も、証拠はない。「無知」な Ishmael なる語り手が、本気でこう言っているとも、一応は考えられる。

- 3) Edgar A. Dryden, *Melville's Thematics of Form: The Great Art of Telling the Truth* (Baltimore : Johns Hopkins Univ. Press, 1968), pp. 97-8.
- 4) Bryan Wolf, "When Is a Painting Most Like a Whale? : Ishmael, *Moby-Dick*, and the Sublime" in *New Essays on Moby-Dick* ed. Richard H. Brodhead (London : Cambridge Univ. Press, 1986), p. 161.
- 5) Warwick Wadlington, *The Confidence Game in American Literature* (Princeton, N. J. : Princeton Univ. Press, 1975), p. 100.
- 6) Paul Brodtkorb Jr., *Ishmael's White World* (New Haven : Yale Univ. Press, 1968), p. 128.
- 7) 興味深いことに、一体感を見事に表現したこの比喻も、いくらかその価値を割り引きされねばならない。この時、熱狂した乗組達は、実は白鯨ではなく、何か他のものを間違えて追っていたからである。(p. 455)